紀　　要

第 9 号

1996. 3

財団法人滋賀県文化財保護協会

目　　次

序
‘廃棄’を考える－貝塚出土資料の検討にあたっての試論－〔鈴木康二〕 …… 1
粟津湖底遺跡第3貝塚の貝類採取活動－セタシジミの成長速度と年齢構成－〔稲葉正子〕…… 11
大津市粟津湖底遺跡出土の錘〔瀬口眞司〕 …… 16
箆状木製品の用途について〔松澤　修〕 …… 25
縄文晩期土器棺墓の調査方法について－近畿地方の場合－〔中村健二〕 …… 38
近江における弥生社会の理解にむけて－その方法と課題－〔大崎康文〕 …… 42
長浜市域における弥生時代の石器－今川東遺跡出土石器を中心に－〔稲葉隆宣〕 …… 51
石組みの煙道を持つカマド－古代の暖房施設試論－〔上垣幸徳・松室孝樹〕 …… 57
集落遺跡出土の鉄製品についての研究ノート〔田井中洋介〕 …… 79
近江へのアプローチ・その3－野洲・栗太をフィールドに－〔近江歴史クラブ〕 …… 85
1．野洲川流域の前・中期古墳について〔鈴木桃代〕 …… 89
2．栗太・野洲における後期古墳の類型的把握
－古墳時代システム論への墓制的アプローチ－〔細川修平〕 …… 94
3．集落遺跡から見た古墳時代の特質－古墳時代システム論への予察－〔細川修平〕 …… 102
4．栗太・野洲郡における掘立柱建物データの抽出と分類〔神保忠宏〕 …… 110
5．近江国の古代駅路と官衙遺跡について〔内田保之〕 …… 122
6．古代における琵琶湖の湖上交通についての予察〔畑中英二〕 …… 130
7．田原道をめぐる二つの地域〔重岡　卓〕 …… 136
8．近江における玉造りをめぐって〔中村智孝〕 …… 149
9．栗太・野洲郡における古代の土器様相〔畑中英二〕 …… 157
10．鉄鉱石の採掘地と製鉄遺跡の関係についての試論
－滋賀県の事例を中心に－〔大道和人〕 …… 164
栗太・野洲郡のまとめ …… 179
大津北郊白鳳寺院の造営計画（その1）〔仲川　靖〕 …… 185
古代遺跡と出土文字資料〔濱　　修〕 …… 200
石山国分遺跡出土瓦の覚書〔平井美典〕 …… 208
巡礼者の宿－鴨田遺跡出土の巡礼札より－〔重田　勉〕 …… 215
焼物二話〔稲垣正宏〕 …… 220
蒲生稲寸氏について－近江古代豪族ノート5－〔大橋信弥〕 …… 224
律令神話に於ける農業神について〔造酒　豊〕 …… 233

日本古代の対外関係史の一様相
　－日本古代史研究ノートあるいは覚書その２－〔芝池信幸〕 …… 238
遺跡の撮影〔阿刀弘史〕 …… 243
新聞報道にみる文化財保護25年－新聞記事データベースの作成と利用－〔中川正人〕 …… 252

古代遺跡と出土文字資料

濱　　修

1．はじめに

墨書土器やヘラ書き土器、木簡などの出土文字資料の増加は文献資料だけでは限界のあった古代の集落の様相や政治制度の解明などに多くの資料を提供してきた。墨書土器では静岡県伊場遺跡、石川県東大寺領横江庄遺跡を代表として府県別、地域別の集成が始まり、文字内容の分析や出土した遺構の性格、遺構内での出土状況の検討や、近年では墨書土器と集落相互の有機的結合から、村落共同体論にまで論究されている。[1] 出土木簡の多くは『木簡研究』に集成されて、主に藤原京、平城京、長岡京などの都城から出土し、「長屋王家木簡」「二条大路木簡」は数万点も出土している。また、地方でも静岡県の伊場遺跡をはじめ兵庫県の山垣遺跡や新潟県の八幡林遺跡、福島県の荒目田条里遺跡など重要な木簡が相次いで出土して文献資料の空白を埋めている。

滋賀県内の主な出土文字資料は7世紀初頭にまで遡る桜生古墳群から出土したヘラ書き壺、中主町の西河原森ノ内遺跡を中心とした7世紀後半から8世紀前半の木簡群、紫香楽宮の位置を決定付けた宮町遺跡出土木簡などその歴史的意義は大きい。

本論では滋賀県内から出土した7世紀～10世紀を中心に墨書土器や木簡など主要な文字資料にふれ古代集落の考察の手がかりを探りたい。

2．出土文字資料の調査経過

滋賀県内の墨書土器やヘラ書き土器は1983年秋田裕毅氏がまとめ、[2] 1987年岡本武憲氏が県内の資料を集成し、106遺跡800点以上の墨書及びヘラ書き土器の分類を行った。[3] 岡本氏はその中で、時代別出土数の集約と主な字句の検討を行いその結果、時期別出土量は7世紀後半～10世紀前半までをピークとしてその後は減少するとし、全国的な傾向と一致するとした。また出土文字の検討では「寺」「家」「殿」「宅」の文字から律令制下の集落論に触れた。

これと前後して、各遺跡での個別の論考も進められた。白井順子氏はマキノ町小荒路十寺遺跡出土の「大家」「常大家」など墨書土器から小荒路十寺遺跡を律令三関の一つ愛発関が廃止されたあとの地方豪族による私的な関とした。[4] また、木戸雅寿氏は笠原南遺跡出土の奈良時代後半から平安時代前半の「越殿」「懸大家」などの墨書土器と区画内の掘立柱建物から、この遺跡を「越前からの田使を要し寺領荘園の荘家または荘所」と位置づけた。[5]

1990年代になるとそれぞれ出土遺跡の報告書で墨書土器について論考されている。[6]

現在県下の、墨書土器やヘラ書き土器は出土遺跡数は150以上、出土点数も1000点を越えている。木簡も出土した多くは『木簡研究』に集成されて、その数は44遺跡2210点に及び、平安時代までででも30遺跡230点になる。主要な出土遺跡では西河原森ノ内遺跡、湯ノ部遺跡、光相寺遺跡

を含む西河原遺跡群の７世紀後半～８世紀初頭の35点は質量共に群を抜いている。また、紫香楽宮跡を決定つけた宮町遺跡の150点の木簡も貴重である。

３．墨書・ヘラ書き土器の初現

県内出土で古い時期の土器文字資料は７世紀前半になる。野洲町桜生七号墳[7]では横穴式石室から出土した７世紀初頭の須恵器の短頸壺の外面体部にヘラ書きされた文字は「此者□□首□□」で、「此者」がこの古墳の被葬者とすると被葬者は首姓を持つ野洲郡の有力地方豪族とされる。大津市穴太廃寺[8]から出土したヘラ書きの文字瓦は「庚寅年」と記されて630年か690年が考えられるが、穴太廃寺下層の創建寺院に伴うもので630年とされる。集落遺跡の古いものは守山市今市遺跡[9]の溝から出土した須恵器の坏蓋の内面に記された□□□□の４文字の墨書である（図１参照）。この坏蓋は内面に返りの付くタイプで７世紀第４四半期でも古い時期になる。墨書の内容は解読困難であるが２文字目は比、３文字目が留とすると今市遺跡の周辺に阿比留（あびる）という地名があり、中主町であるが比留田（ひるた）とする地名もあり、これらから地名と考えることができる。特異な書体や地名を示す墨書内容からも集落遺跡出土の墨書土器の古い形態を示す。また、７世紀後半では滋賀里遺跡[10]から土師器坏蓋に「有徳海兎魚大」などの習書があり、中主町西河原森ノ内遺跡[11]からは木簡とともに「神主家」「神」など多くの墨書土器が出土している。７世紀代に集落から寺院・官衙を含めて墨書やヘラ書き文字が普及していた様子が伺える。

４．宮・官衙遺跡

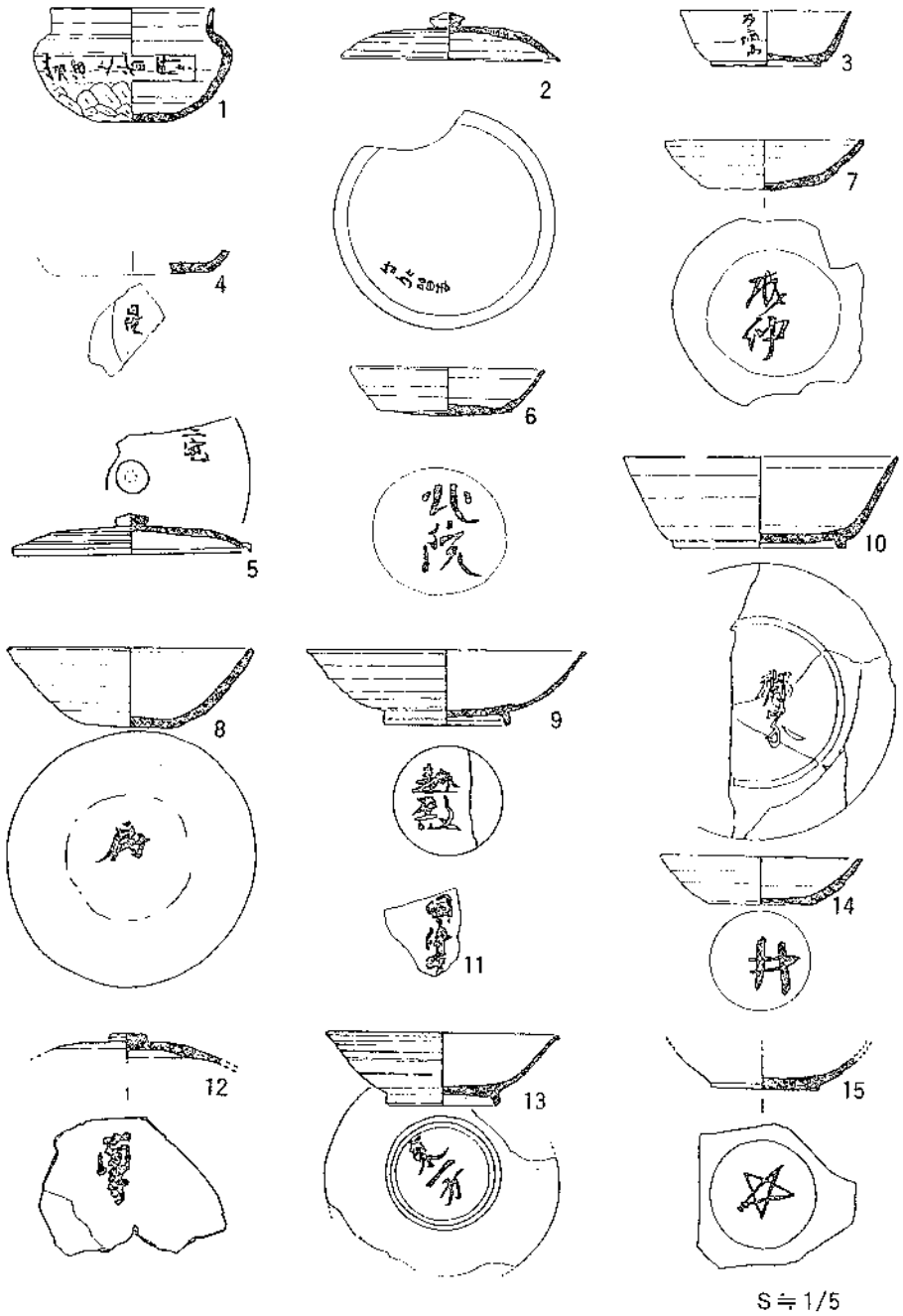
宮・官衙関連遺跡で文字資料が出土しいている遺跡は宮町遺跡（紫香楽宮）、近江国衙（近江国府跡）などがある。

大津宮推定地の錦織遺跡[12]では良好な文字資料はないが、大津宮内裏正殿とされるＳＢ015から南南東へ約530ｍの北大津遺跡[13]南北溝ＳＤ１から７世紀後半～８世紀初頭の土器と共に音義木簡が出土している。錦織遺跡から流れてきた木簡の可能性はあるが、大津宮の遺物と判断することは早計である。

宮町遺跡[14]では南北方向に規則的な掘立柱建物、塀、溝などの遺構が検出されている。建物周辺の溝や土壙からは木簡、墨書土器が出土して、紫香楽宮の存在を決定づけている。木簡では「垂水王」「奈加王」「皇后宮職」「山背国司解」など、墨書土器では須恵器坏身外面に書かれた「万病膏」は遣唐使が携帯する薬と言われる。これらの遺物は柱根の年輪年代と併せて宮町遺跡が紫香楽宮であるとする重要な資料となった。

近江国府跡[15]はその建物遺構から近江国衙であることは明確であるが、文字資料としては木簡墨書土器など良好な遺物はないが、平瓦に刻印された「国･木川･修」などがある。今後、低湿地の調査では木簡などの資料が出土すると思われる。

国庁周辺の官衙関連遺跡では勢多駅家と推定される堂ノ上遺跡[16]で「承和十一年六月」捺印の文字瓦が出土しているほか、野畑遺跡や東光寺遺跡などでも墨書土器が出土している。



1．野洲町桜生７号墳　2．守山市今市遺跡　3．信楽町宮町遺跡　4・11．大津市野畑遺跡
5．中主町光相寺遺跡　6．近江八幡市高木遺跡　7．中主町西河原遺跡　8．能登川町斗西遺跡
9．守山市笠原南遺跡　10．草津市北萱遺跡　12．大津市上高砂遺跡　13．蒲生町野瀬遺跡
14．近江八幡市賀茂遺跡　15．大津市大谷遺跡

第２図　県内主要墨書土器

野畑遺跡[17]では第1次調査で8世紀前半～9世紀前半の掘立柱建物6棟、井戸などの遺構が検出され、木沓、斎串などが出土し、2次調査では8世紀後半～9世紀前半の建物群、瓦窯、木簡、墨書土器などが出土して、近江国庁関連施設か勢多庄の庄家とも考えられている。墨書土器は「日佐」「卜田□」「宅」「□友」「国分僧寺」など13点が出土し興味深い。「国分僧寺」は近接する瀬田廃寺を指すものとされる。「日佐」は本来通訳の意味であるが、通訳を掌る職明がカバネとなった。近江では渡来系氏族が多いが志賀漢人と呼ばれる氏族に穴太日佐や大友日佐など滋賀郡内を中心に居住し[18]栗太郡では木川郷戸主大友日佐椋麻呂が居る。「日佐」の墨書土器から野畑遺跡の住人が大友氏または穴太氏とも推測され「□友」が「大友」の可能性があることから大友日佐○○が居住していたことも考えられる。（日佐＝長とする考え方のある。）

郡衙関連遺跡では栗東町の岡遺跡[19]が8世紀～9世紀にかけて規格制を持つ大規模建物群が造営され栗太郡衙とされる。墨書土器は2点灰釉陶器の坏底に「張人」「宗」がみられるが、群衙遺構との直接の関連は明確ではない。

岡遺跡周辺2.5kmには栗東町の手原遺跡、草津市の大将軍遺跡、岡田追分遺跡、矢倉口遺跡など奈良時代から平安時代にかけて官衙的色彩をもつ遺構・遺物がみつかっている。大将軍遺跡[20]ではこれまでに8世紀前半～10世紀前半の時期の掘立柱建物80棟以上、井戸5基、溝30条のほか木簡、墨書土器、円面硯などが見つかっている。木簡は井戸の最下層から出土し「伴（伊）□□□郷郷郷」と記し、墨書土器は8世紀中の須恵器坏身底に「稲万呂」「美」と記す。栗太郡衙に近いことから郡衙関連の官人層などの居住集落及び郡衙等の出先機関（正倉・借倉）と推定している。

このほか郡衙推定地では木簡や墨書土器が出土して推定の根拠となっている。今津町日置前遺跡[21]では8世紀中葉の大型建物群と「諸上内」の墨書土器が、高島町鴨遺跡[22]では9世紀後半～10世紀前の大型建物と5点の木簡、「大領」「次官」「廣津弥」など180点の墨書土器が出土している。そのほかの郡衙推定地では野洲郡衙が検出遺構から野洲町小篠原遺跡、蒲生郡衙推定地では近江八幡市御館前遺跡が大型建物と「西殿」の墨書土器、隣接する勧学院遺跡出土の木簡・墨書土器などから推定の根拠となっている。神崎郡衙推定地は五個荘町大郡遺跡があり、愛知郡衙推定地の愛知川町鯰遺跡では「郡」の墨書土器が郡衙推定の根拠になっているがいずれも決めてとなる遺構の確認はない。

このように郡衙推定地では岡遺跡が区画された大型建物群から栗太郡衙とされ、鴨遺跡は大型建物と木簡や「大領」の墨書土器が出土し高島郡衙と推定されるが、それ以外では出土した木簡や墨書土器から推定の根拠とする場合が多い。しかし、「郡」「殿」などの墨書土器1点を持って郡衙とするこは慎重を期する。

5．寺院遺跡

寺院遺跡では「寺」「坊」「佛」などの墨書が多くみられるのは当然である。愛知川町畑田廃寺[23]では習書木簡のほかに「僧寺」「寺」などの墨書土器が多く出土している。蒲生町野瀬遺跡[24]は

宮井廃寺の関連遺跡で８世紀の須恵器に「寺」が、10世紀中の灰釉陶器に「西一坊」「東一坊」や11世紀の灰釉には「造佛」などの寺院関連の墨書土器が出土し、宮井廃寺の存続時期を再検討する資料ともなっている。また、墨書土器出土の分布範囲が寺域よりも広がって範囲の再検討の材料にもなっている。

「寺」の墨書土器をもとに、出土遺跡の周辺に寺院跡を求めている場合もある。例えば、大津市上高砂遺跡[23]の「南寺」の墨書土器は近接する長尾瓦跡出土の「南」の押印瓦と崇福寺跡出土瓦と関連させて「南寺」を崇福寺跡の南尾根の建物群に推定している。野洲町北桜遺跡[24]でも平安から奈良時代の遺物で「寺」「佛」など墨書土器と布目瓦の小片が出土しており、寺院跡が発見される可能性もあるが寺院に関連した集落遺跡かも知れない。大津市浮御堂遺跡[25]からも９世紀～10世紀の須恵器など約100点の墨書土器・巡方などが出土しているが、遺構の性格は明確でないため寺院関連遺物というより公的な湖上交通の施設にに伴うものと推定している。

６．集落及び「官衙的集落」遺跡

関東地方では８世紀～９世紀にかけての大規模集落から数100点の墨書土器が出土し、各住居跡内からも個別に出土する。[26]その墨書土器を分類すると集落内で住居群ごとに特定の文字を使用している例があり、これらの資料から鬼頭清明氏は「土器に記された墨書は家父長制的世帯共同体の家父長に所有され、その共同体ないしは、それに隣接した家父長制的世帯共同体に共通して使用された」[27]と推測している。平川南氏は墨書土器と集落の検討対象を「集落形態及びその変遷が比較的明確に捉えられること、墨書土器の絶対量および墨書内容の種類が豊富であること」[28]の２点をあげている。

こうした東国の特徴を畿内や近江に類例化することは難しい。県内の墨書土器の出土状況は集落遺跡では遺跡から１～２点出土する例がほとんどで、まとまって出土する場合は官衙的性格が強い。

一般集落とはやや異なり墨書土器・木簡・硯・石帯などが出土し、掘立柱建物群が並び、郡衙や寺院遺跡ともいえない遺跡がある。これらを「官衙的集落」遺跡と仮称する。集落遺跡の性格つけには難しいものがあるが、関和彦氏[29]は「郷家」遺跡の条件として、①掘立柱建物の存在また企画性のある建物配置、②円面硯・転用硯の出土、③墨書土器・木簡の出土（館・家・郷長の墨書・刻書）を掲げ、滋賀県の遺跡では北方田中遺跡を上げている。（なお、当遺跡出土木簡は13世紀の井戸から出土しており律令期の建物群とは時期が異なる。[30]）御厨など文献に残る遺跡の比定は比較的検討し易いが郷家・荘家など推定は難しい。しかし、こうした視点から「官衙的集落」遺跡を再検討してみる必要があろう。

代表的な遺跡に草津市赤野井遺跡・大将軍遺跡、守山市服部遺跡・川田川原田遺跡・笠原南遺跡、中主町の湯ノ部遺跡・西河原森ノ内遺跡・光相寺遺跡を含めた西河原遺跡群、能登川町斗西遺跡、米原町筑摩湖岸遺跡、長浜市新庄馬場遺跡・大戌亥遺跡、マキノ町小荒路十寺遺跡、高島町永田遺跡などがある。このうち服部遺跡[31]は銅印・帯金具、５点の木簡、「南殿」「鳥益」など

多数の墨書土器が出土、奈良時代の南北軸の掘立柱建物群などから服部郷の中心とされる。守山市赤野井遺跡[33]は「赤見」「正丁」などのヘラ書き土器や、6世紀後半～10世紀にかけて3期の南北方位の掘立柱建物から6～7世紀の建物は「ミヤケ」や8世紀の建物群は「赤見」（明美郷）の郷家と推定される。笠原南遺跡[5]は荘家を想定し、斗西遺跡[6]は8世紀後半～9世紀の溝から「厨」「大家」などの墨書土器が143点出土し、神崎郡神主郷の郷家の可能性もあるとしている。

そのほか、御厨房と推定される遺跡に筑摩湖岸遺跡[34]出土の「郡」などから筑摩御厨に、新庄馬場遺跡[35]は大型建物と「北家」「平福家」などの墨書土器から福永御厨に推定している。小荒路十寺遺跡[4]は地方豪族の私的な関、永田遺跡[36]も一般集落と異なる、木簡や帯金具などが出土している。中主町の西河原遺跡群[37]は7世紀後半～8世紀にかけての20点近い木簡や約50点に及ぶ墨書土器の出土など県内でもと特異の様相を示す。遺跡の性格については別の機会に検討したいが、山尾幸久氏[38]は「7世紀後半に国家的施設の「駅」が置かれその後「駅家」「評家」未分化の施設、更に駅の分離し野洲評の行政拠点となり終わりには評家も駅家も野洲町小篠原に移動したものではないか」とする。

この他、10世紀までの集落遺跡で墨書土器の比較的まとまって出土している遺跡では大津市穴太遺跡[39]「安」など墨書土器が6・7世紀の渡来系氏族の集落が廃絶した上層から出土し、草津市北萱遺跡[40]では須恵器坏身底に「郡衙・有」が重ね書きされたものや「三宅」などが出土し、上流にある栗太郡衙（岡遺跡）の港湾施設か、「三宅」＝ミヤケから荘家の可能性も考えられる。守山市中島遺跡[41]では「□家」の墨書土器や帯金具、南北溝などが検出され、近江八幡市高木遺跡[42]では「北院」の墨書土器が掘立柱建物とともに蒲生郡統一条里方向の溝から出土している。そのほか、蒲生町杉ノ木遺跡では「田司家」など、能登川町柿堂遺跡[43]では9・10世紀の自然河道より「佐見麻呂」「田中」の墨書土器や「錦織主寸」の木簡などが出土している。彦根松原内湖遺跡では「將」など、長浜市大戌亥遺跡[44]は「□村寺」「家」など、新旭町正伝寺南遺跡[45]は「南」などの墨書土器が出土している。

これらの遺跡でも東国の集落間の墨書土器の共有といった様相は見られず、墨書土器そのものが集落個別で完結する意味合いが多いようである。

更に、全国的に墨書土器が衰退する11～13世紀に、県下では黒色土器などに吉祥句と思われる墨書や意味不明の1文字墨書が近江八幡市を中心に湖東地域に多く出土している。近江八幡市金剛寺遺跡[46]出土の黒色土器椀の外面に「烏烏烏烏･･･」「魚の絵」「利右エ門」の墨書は前者の典型的であり、近江八幡市加茂遺跡[47]の「井」などの墨書や線刻を持つ黒色土器が10数点溝から出土している。（「井」は井戸の井だけでなく、呪符等に用いるドーマンと呼ばれる魔除け記号の「井」ともされる。[48]）木簡でも13世紀代に野洲町三堂遺跡・中主町吉地薬師堂遺跡・山東町北方田中遺跡などで井戸や溝から呪符木簡が出土する。

7．おわりに

近江では7世紀後半には墨書土器が集落遺跡にも出現し、その後、8世紀～10世紀を中心に官

衙遺跡から集落遺跡まで広く出現する。木簡では湯ノ部木簡がすでに天武五(676)年に出現し西河原遺跡群や、宮町遺跡、鴨遺跡などを中心に多く出土する。これは近江国に大津宮が置かれたり、東国への交通の要衝地である点を考えても、古代近江が特筆すべき地域であった証である。

墨書土器は近江では、東国のように同一文字を記す土器が集落内の住居単位ごとに出土したり、集落群内ごとに出土するような状況はみられない。東国の状況は集落内成員の精神的・血縁的紐帯を墨書土器を媒介に家父長的共同体の首長が把握する状況が伺え、共同体規制の強さを示している。近江では墨書土器の出土量の絶対量は少ないが、出土状況を見る限り出土遺跡単位で完結し、墨書内容がその遺跡の性格（官衙・寺院・「官衙的集落」・集落）を示すものが多く、集落間や集落内の紐帯として墨書土器を利用する状況はみられない。東国と近江のこうした違いは律令制下の古代集落の形成・再編・解体過程の違いを示すものであろう。

さらに、全国的には墨書土器が衰退する11～13世紀にかけて黒色土器を中心に吉祥句が多くみられる傾向は古代遺跡における文字資料の律令制的性格が10世紀～11世紀段階で終了あるいは変質し、古代の墨書土器の性質の１つである呪術的な性格を中世社会に引き継いだものと思われる。こうした文字資料の変化は律令国家体制から王朝国家体制への変遷期とも対応するだろう。

今回は紙面の都合上、出土状況や器種・墨書の位置・筆跡など細かい分析[18]はできなかったが次の機会に論考したい。

註

(1) 仲山英樹「墨書土器と集落遺跡」『歴史評論538号』 1995年　現在の墨書土器研究の成果と課題がまとめられている。

(2) 秋田裕毅「近江の官衙－墨書土器と硯－」近江風土記の丘資料館　1983年

(3) 岡本武憲「近江出土の墨書土器について」『滋賀県埋蔵文化財センター紀要３』 1989年

(4) 白井順子「律令制下の関について」『滋賀考古学論叢第２集』1985年

(5) 木戸雅寿「笠原南遺跡出土の墨書土器について」『滋賀県埋文センター紀要３』 1989年

(6) 舘野和己「斗西遺跡出土の墨書土器群について」『能登川町埋蔵文化財発掘調査報告書第27集斗西遺跡２次』能登川町教委　1993年

(7) 大崎哲人『桜生古墳群発掘調査報告書』県教委・㈶県協会　1992年

(8) 大橋信弥・仲川靖「滋賀県穴太廃寺」『月刊文化財』 1985年

(9) 大道和人「県内最古級の墨書土器出土」『滋賀埋文ニュース179号』県埋文センター　1995年

(10) 松沢修ほか『湖西線関係遺跡調査報告書』県教委・㈶県協会　1973年

(11) 辻広志『西河原森ノ内遺跡第３次発掘調査報告書』中主町教委　1987年

(12) 林博通『錦織遺跡』県教委・㈶県協会 1992年

(13) 中西常雄・石原道洋『北大津の変貌』1979年

(14) 鈴木良章『宮町遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ』信楽町教委 1989･1990年

(15) 丸山竜平ほか『史跡近江国衙跡発掘調査報告書』県教委　1977年

(16) 林博通・葛野泰樹「堂ノ上遺跡調査報告Ⅱ」『昭和五十年度　滋賀県文化財調査年報』県教委　1977年

(17) 林博通ほか「大津市野畑遺跡第二次調査」『平成四年度　滋賀県埋蔵文化財調査年報』県教委　1994年

(18) 大橋信弥「近江における渡来氏族の研究」『青丘学術論集第６集』 1995年

(19) 平井寿一ほか『岡遺跡発掘調査報告書』栗東町教委・㈶町文体振興財団　1990年

(20) 谷口智樹ほか「大将軍遺跡発掘調査」『草津市文化財年報平成5年度』市教委　1995年
「郡衙関連の施設を発見」『滋賀埋文ニュース第183号』　1995年
(21) 葛原秀樹『今津町文化財調査報告書第3～5集』町教委　1984～1986年
(22) 丸山竜平ほか『鴨遺跡』県教委・㈶県協会・高島町教委　1980年
(23) 近藤滋ほか「愛知郡愛知町畑田廃寺」『ほ場報告書Ⅵ－4』県教委・㈶県協会　1979年
(24) 北川浩「野瀬遺跡」『ほ場報告書Ⅰ』蒲生町教委　1989年
(25) 青山均『上高砂遺跡発掘調査報告書』大津市教委　1992年
(26) 古川与志継「北桜遺跡」『三堂・野々宮遺跡他発掘調査概要報告書』野洲町教委　1982年
(27) 尾崎好則「浮御堂遺跡発掘調査」『びわ湖と文化財』水資源開発公団　1984年
(28) 平川南・天野努・黒田正則「古代集落と墨書土器」『国立歴民博研究報告22』　1989年
(29) 鬼頭清明「郷・村・集落」『国立歴史民俗博物館研究報告22』　1989年
(30) 関和彦『日本古代社会生活史の研究』校倉書房　1994年
(31) 奈良俊弥「北方田中遺跡」『ほ場報告書Ⅷ－6』県教委・㈶県協会　1985年
(32) 山崎秀二ほか『服部遺跡発掘調査概報』県教委・守山市教委　1980年
(33) 山崎秀二「守山市赤野井遺跡」『昭和五十一年度滋賀県文化財調査年報』県教委　1979年
(34) 中井均『筑摩湖岸遺跡発掘調査報告書』米原町教委 1986年
(35) 吉田秀則「新庄馬場遺跡」『ほ場報告書ⅩⅢ－4』県教委・㈶県協会　1986年
(36) 「高島郡高島町永田遺跡」『ほ場報告書Ⅶ－8』県教委・㈶県協会　1985年
(37) 注(11)、山田謙吾「光相寺遺跡第11寺発掘調査概要」徳網克己「西河原遺跡第3次発掘　調査概要」（『中主町文化財調査報告書第30・34集』町教委　1991・1993年　濱修『湯ノ部遺跡発掘調査報告書』県教委・㈶県協会 1996年など
(38) 山尾幸久「676年の牒の木簡」『湯ノ部遺跡発掘調査報告書』県教委・㈶県協会　1996年
(39) 青山均『穴太遺跡発掘調査報告書』大津市教委　1989年
(40) 三宅弘『北荒遺跡発掘調査報告書』県教委・㈶県協会　1994年
(41) 山崎秀二『中島遺跡発掘調査報告書』守山市教委　1985年
(42) 小竹森直子「高木（浅小井）遺跡」『ほ場報告書ⅩⅥ－Ⅱ』県教委・㈶県協会　1989年
(43) 山本一博「柿堂遺跡」『能登川町埋蔵文化財調査報告書第8集』町教委　1987年
(44) 「大戌亥遺跡」『平成3年度調査埋蔵文化財展』㈶県協会　1992年
(45) 大沼芳幸ほか「正伝寺南遺跡」県教委・㈶県協会　1990年
(46) 横田洋三『金剛寺遺跡』『ほ場報告書ⅩⅧ－6』県教委・㈶県協会　1991年
(47) 大沼芳幸『加茂遺跡発掘調査報告書』県教委・㈶県協会　1994年
(48) 平川南「墨書土器とその字形」『国立歴史民俗学博物館研究報告第35集』 1991年、天野努「古代東国村落と集落遺跡」『研究紀要16』千葉県文化財センター　1996年など

編集後記

この冬は、久しぶりに雪の多い年となり、外での調査では寒さに堪える日々を過ごされたことと思います。今年は当協会設立25周年にあたり、日頃の調査や普及活動に加え、安土城考古博物館で、企画展示『いにしえの渡りびと－近江の渡来文化－』や、それと関連したシンポジュームを実施してまいりました。本紀要も25周年ということで、例年にくらべて多くの論考が集まりました。つきましては、多くの方からのご叱正とご指導を賜れば幸いです。　平成８年３月

平成８年３月

紀　要　第９号

編集・発行　財団法人　滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781

印刷・製本　富士出版印刷株式会社
大津市札の辻４－20
Tel(0775)23-2580 Fax(0775)24-6668